

情 報

国際会議出席報告
—2010 年度前期若手研究者海外学会出席助成—
第 11 回国際ソバシンポジウム参加報告

笠島真也

(東京農業大学生物産業学部)

2010 年 7 月 19 日～23 日に、ロシアの首都モスクワから南 400 km に位置するオリョールで開催された第 11 回国際ソバシンポジウム (The 11th International Symposium on Buckwheat) に出席した。本シンポジウムは、ソバ属作物に関わる生理生態、遺伝育種および品質加工などの分野の研究成果を報告する場として、国際ソバ研究者連合 (International Buckwheat Research Association) 主催で 3 年に 1 回世界各地で開催されているものである。3 課題の Preliminary session をはじめ 70 課題を超える口頭発表とポスター発表が行われたなか、私は普通ソバの受精率における遺伝子型×環境交互作用ならびに収量との関連性についてポスター発表を行った。ポスター発表のコアタイムが 30 分と非常に短かったが、世界中の作物育種の研究者の方々と活発な議論をすることができた。また、ソバの品質加工を専門とする研究者の方々とも意見交換ができ、勉強になった。普通ソバやダツタンソバの機能性などの報告が多いなか、ソバの収量成立に関わる生理生態の報告は少ないように感じた。ソバは代表的な低収作物の 1 つであり、

収量成立プロセスやその遺伝的変異は必ずしも十分に明らかにされていない。今後でも有用作物としてソバが注目されることが予想される一方で、様々な観点からさらなる低収要因の解析が必要であると感じた。

そのほか、インドや中国におけるソバ遺伝資源の現況や欧州各国のソバの栽培技術に関する報告が行われた。ソバの安定生産に向けて、こうした貴重な遺伝資源や日本と異なる気象条件における収量性の品種特性などの情報を共有し、研究を発展させていく必要があると感じた。

シンポジウムのなかで全ロシアマメ科作物および穀物研究所の試験圃場を見学させていただく機会もあり、有限伸育や緑色花タイプのソバ遺伝資源などを観察することができた。特に日本の夏型のソバよりも感光性の低いロシアのソバを直接観察することができたことは貴重な体験となった。

最後に、本シンポジウムへの出席にあたり、日本作物学会の平成 22 年度若手研究者海外学会出席助成による援助を受けました。記してここに厚くお礼申し上げます。